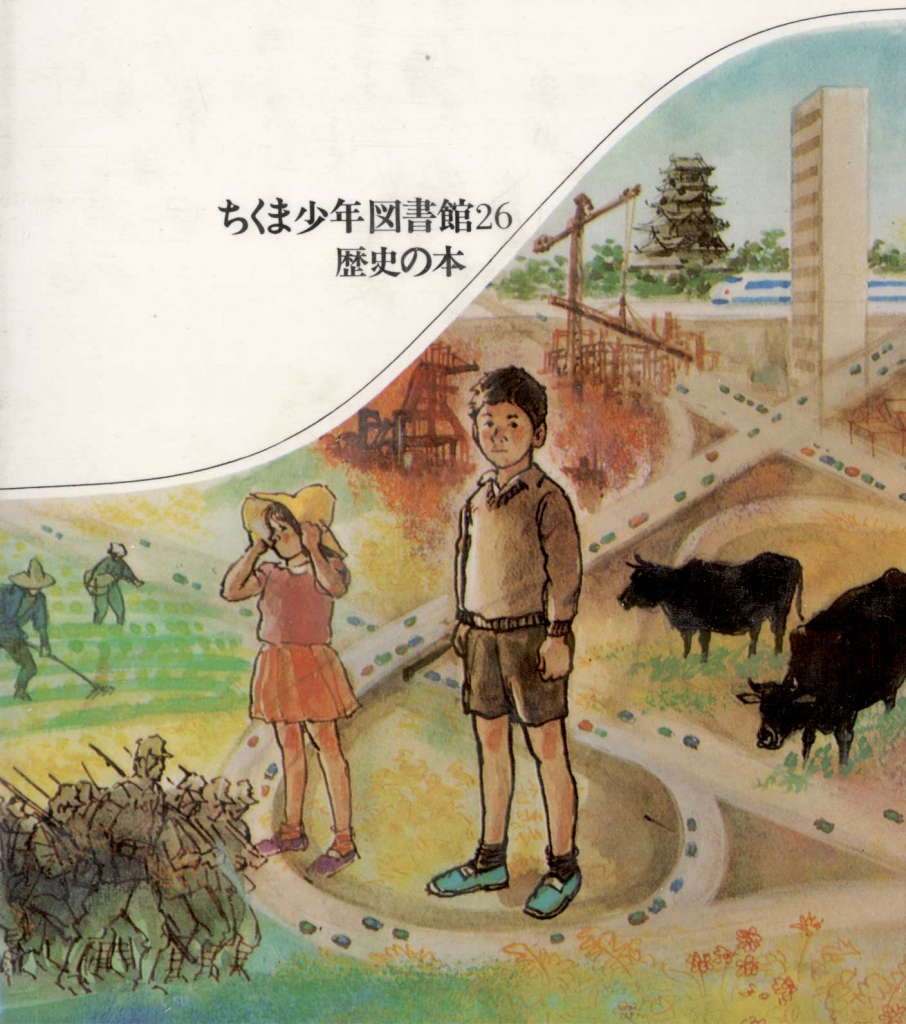


君はいまどこにいるか



山代巴

ちくま少年図書館26
歴史の本





君はいまどこにいるか

山代巴

ちくま少年図書館

歴史の本

210.7/君はいまどこにいるか

著者略歴

1912年6月、広島県に生まれる。
女子美術専門学校中退後、ガラス
工場の女工などを経て、戦後は農
村問題にとりくみ現在に至る。お
もな著書に『蒔のとう』『荷車の
歌』『民話を生む人々』『連帯の探
求』『因われの女たち』などがあ
る。

筑摩書房/1975年初版
243pp./20cm/四六判



1975年5月28日 第1刷発行
1987年5月15日 第8刷発行 定価1200円

著者 © やましろともえ
山代巴

発行者 せきねひでさと
関根栄郷

発行所 ちくましよほう
株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京 (291) 7651 (営業)
(294) 6711 (編集)

郵便番号 101-91/振替・東京 6-4123

Printed in Japan 厚徳社印刷・和田製本

ISBN4-480-04026-9 C8010

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読書係宛に
御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

君はいまどこにいるか





もくじ

わかれ道

1 不景気とおじいさんの生き方 7

2 戦争と平和のわかれ道 16

3 教え子を戦争にかりたてた一人の教師として

4 敗戦前後のこと 37

沈黙を破った人びと

1 ハンストの抗議と退学

46



お母さんたちの歩み あゆ

2 山奥にもいた被爆者たち やまおく ひばくしゃ 61

3 甲神部隊の父 こうじんぶたい 67

4 みな殺し兵器をなくすために へいき 75

1 怒りの歌 いか 87

2 平和大会成功のかげに 95

3 忘れられた犠牲者たち ぎせいしや 102

4 母ちゃん農業のゆくえ 114

牛飼いの昔と今 か むかし

1 天神様のすきな牛 てんじんさま 120



開発の行く手にあるものは

- 1 雨が教えるもの 145
- 2 みんなが安全に生きるには 164

宿題のレポートから

- 2 肉用の牛飼いか 130
- 3 小さな公害 140

- 1 少年の目は何を見たか 174
- 2 中国縦貫道じゅうかんどうと新都市計画 177
- 3 恐ろしい未来か、安全な未来か 183



見学旅行

- 1 福山の日本鋼管こうかんか日本鋼管の福山か 189
- 2 自分はいまどこにいるのか 203
- 3 林間の牧場 213
- 4 これからどう生きていけばいいのか 233

おわりに

さし絵 市川禎男

わかれ道

1 不景気とおじいさんの生き方

中国山脈を横断する国道五四号線が、江川をわたるあたりに三次という、人口三万六千あまりの都市があります。藤原谷は三次市の南のはずれで、国道五四号線からは、人家のない山あいの道を四キロも山奥へはいったところにあります。

秋のなかばのある午後のことでした。藤原谷の田んぼでは、豊かにみのった稲がそよ風にゆれていて、あちこちに散らばる農家のほとりには、赤く色づいた柿の実が夕陽に輝いていました。谷間の入口にある家では、母屋の横の大きな柿の木に登って、柿もぎをしていました。梢に近い枝にまたがり、先がハサミになっている長い竹竿で、柿の小枝を引き寄せているのはお父さんで、お父さんのまたがっている枝から少し下の枝で、お父さんと同じように、長い竿で柿の小枝を引き寄せているのは、和志君という小学校五年生の少年でした。お父さんはがっちりした体格でしたが、近眼のめがねをかけていました。和志君はクラスでは八番めの背丈で、どちらかというとやせ型でした。お父さんは、

「和志！ だいぶうまくなつたぞ、その調子で引き寄せて、そこで竿さおをくるつと回す、そう、ちゃんと小枝がおれるだろう」

そういつて、和志君に柿かきのもぎ方を教えていました。和志君はお父さんが教える通りに、早くじょうずに柿もぎができるようになろうと、夢中むちゆうになっていました。もいだ柿は、そばの枝えだにつるしているカゴに入れ、カゴにいっぱいになるとお父さんは、

「おーいカゴをおろすぞー」

と綱つなをゆるめて下へおろします。柿の木の下には、白い木綿もめんの作業帽子ぼうしをかぶった、小柄こがらなお母さんがいて、

「ほいしゅうー」

と上をあおいでカゴを受けました。お母さんのそばのムシロには、いままでもいだ柿が山やま盛りになっていました。その柿の山を背せに、お父さんによく似た体格たかうしのおじいさんがすわっていて、一個一個ていねいに柿をふき、竹のキリでへたのところあなに穴あなをあけて、樽たもとにつめていました。樽にいっぱいいっばいに柿をつめると酒を少しかけてふたをします。こうしておくおくと自然に渋しぶがぬけて、柿が甘あまくなるのです。そういう柿を樽柿たもとがきといいます。おじいさんは毎年、柿の実じゆくが熟じやくしてくると、遠くの町でくらす親戚しんせきへ、自分の作った樽柿を送るのを楽しみにしているのです。お母さんはおじいさんの助手で、上からおりたカゴを受けとると、ムシロにあけて、樽柿にする柿とつるし柿にする柿をより分け、つるし柿にするのは、へたと小枝こえだとがカギになるように、ていねいに小枝をハサミで切っていましたが、ふと高



い枝の和志君を見上げて、

「和志！ 宿題していないんでしょ！」

和志君は「うーん」と返事はしましたが、心の中では気にもとめずに、柿をもぐことに夢中でした。お母さんはまた、

「あんた宿題をしないで学校へ行ったら、先生にまたしかられるでしょう。お友だちは宿題のほかに塾へも通っているんよ！」

こんなときお父さんは、きまったように、「自分から進んでする勉強でなけりゃあ力にはならんよ」と、お母さんをたしなめるか、黙っているかどちらかです。きょうは黙って知らぬふりして柿をいいでいました。おじいさんは、いつもの通りきょうもまた、

「そう宿題じゃ塾じゃいうてやるな。晃なんぞは、小学校でも中学校でも勉強はせなんだが、いまは公立の大学へはいって、本気で勉強しとるじやないか、ときがきたらせいいわんでも、するようになるわい」

と、和志君の味方になってくれました。

晃君は和志君のいところですが、生まれたときにはもうお父さんは戦死していて、小学校の教師をしているお母さん一人に育てられたので、くらしに無理があつたのでしょう。小さ

いときは病氣ばかりしてからだが弱かったので、小学校へは一年おくれて入学しました。一年生のときも二年生のときも学校へ通うのがせいっぱいで、通知表はいつも三や二ばかりだったということです。三年生のときは腎臓炎になり、一年休学しました。そんなことで小学校は卒業するまで、五も四も、もらったことはなかったのです。中学校のころは、からだを丈夫にするといつて、魚釣りや山登りのすきなおじさんについて、休みのたびに川や山へ行き、勉強はしませんでした。勉強をするようになったのは高校卒業のころからで、大学への入学試験も一度は失敗しました。和志君はそうに人よりおくれて勉強する気になった晃君に、親しみを感じています。晃君は今年やつとある公立大学の四年生で、卒業論文には「備後北部の昭和史」というのを書いています。この夏は卒業論文のために『三次小史』という本や、『巴峽六十年史』という、三次高等学校の、創立からの六十年の歴史をまとめた本などを読んで、おもしろいところは和志君にも話してくれましたから、和志君は自分の宿題よりも晃君の卒業論文のほうに興味を持っていました。和志君が、自分の小カゴに柿がいっぱいになり、

「お母ちゃん、カゴをおろすよ!」

と綱をゆるめてカゴをおろそうとしていたときでした。県道から、かれらの家へ上がる坂道のほうから、

「ホーイ」

と声が飛んできました。和志君が声のするほうを見ると、ジーパンに緑のトレーナを着た

背の高い晃君が、柿の木のほうをあおぎながら、こちらへ来るところでした。和志君は、今の今まで夢中だった柿もぎは捨て、するすると柿の木の幹をおりてきました。

おじいさんは晃君を見ると、

「卒業論文はもうできたかい」

「卒論ゼミへ出すところまではできたんだけど、きびしいんだ。昭和のはじめの世界恐慌が備後北部にどのように作用したか、それを書かんと昭和史にならんいわれたんだ。それでおじいさんに相談に来たんだ」

和志君はむずかしいことになったんだなと思いつつ、晃君とならんでおじいさんのそばへしやがみました。晃君は、

「昭和二年の春に、全国の銀行がたおれそうになって、預金者の信用を失うて大騒動になったのを知っていますか」

「知らんのう、だいたいうちは銀行に関係がなかったからのう」

「それでもおじいさんは若いときに、牛を売って百円札をにぎったり、鰯を売って百円札をにぎったりした。それで納屋を建てたり母屋を建てたりしたいうとったでしよう」

「そうだよ、節子（晃の母）が生まれた年（大正七年）には、牛の景気は悪かったが、蚕がよかった。勇（和志の父）の生まれた年（大正九年）には、牛も蚕もどっちも景気がようて、かわら屋根の納屋普請をすることができた。学（晃や和志のおじ）の生まれた年（大正十二年）には、母屋普請をしたが、そういうときの金は、部落の牛飼い仲間や養蚕仲間の頼もし講

を利用して、あずけたり出したりして、銀行などへは行かなんだ。だいたいこのへんで銀行と関係のあったのは、地主か医者かで、百姓の出入りするところじゃあなかった」

晃君はカバンからノートを出してそのことを書きながら、

「ぼくは一般農民が、銀行と関係がなかったいうことをはじめて聞いた。これはやはり取り上げにやならんな。ぼくのお母さんは、『おじいさんは経済について考えが深い、家計簿なんかびつくりするほどきちょうめんにつけとる』いうとったけど、そういうおじいさんでも銀行と関係がなかったんですか」

「破れも、ひきにぞうりばきで、縄紐をしめて、毎日肥桶をかついでくらす者は、着物を着かえて町へ出ていく暇がおいしい。石の建物の中へはいるのは何やら恐ろしいような気がするじゃあないか」

「おじいさん家計簿を見せてくれますか」

「役に立つなら喜んで見せてやる。もういらんから捨てようか思っておったんじやが」

おじいさんはそういつて、母屋の仏壇の横の戸棚から、和紙をとじた古めかしい家計簿を出してきました。

それは大正十五年から昭和六年末までの金の出し入れを、四冊にとじたもので、開いて見ると、青いたてのけい、が印刷してあって、けいの中へ、ことこまかに金の出し入れが書いてありました。米なども光明錦(米の名)一俵十三円とか、太郎八夏挽一俵十四円六十銭とかいうように、米の品種とその年の相場が比較できるように心をくばってあるのです。

晃君は、

「これは家計簿かけいぼというよりは生活記録といったほうがいい。むかしの人はずいぶんいいことをやっていたんだなあ」

と感心しました。和志君は晃君と縁側えんがわにならんで、不思議そうにその古い家計簿をのぞいていました。台所で夕飯ゆうはんのしたくをしていたおばあさんが、二人に紅茶こうちゃを運んできて、

「米が一俵ひとばら(二〇キロ)五円にまで下がって、百姓ひやうしやうはもうできんいうて騒さわいだ年があったが、あれは何年じやったかのう、たしか昭和のはじめじやった」

といいました。晃君は家計簿の米の収入しゅうにゅうのところをたどりながら、

「五年の家計簿には米を売った記録がないから、六年かもしれんよ。六年の九月に太郎八を一俵五円四十銭で売ってある」

するとそばにいたおじいさんが、

「米の大暴落だいはうらくは昭和五年じや、あの年の夏の百姓は、安い繭まゆを売って高い米を買いわねておったが、九月になると大豊作だいはうさくの見込みになって、米の値ねがひどう下がつて、東京や大阪の米の取引所とりひきじよが立ち合いを中止した。そこで一俵五円にまで下がったんじや。大阪で五円ごえんのときは、この奥地おくちは四円にたたかれる。そこでわしらは、その年は米を売らなんだ。大阪の米穀商人べいこくしやうじんらは、米の値をつり上げるために、神戸の波止場はとばを作るのに、土囊どふのかわりに米を俵たわらごと海に沈しずめておるいうことが、ここらでも評判ひやうばんになって、わしらはお先さきまっ

暗くろだった」

おばあさんは、

「米が一俵五円になった年には繭の値も下がった。景気のいいときには、上繭は百匁一円二十五銭で売れたのに、あの年は春蚕の繭がただの二十銭。秋蚕の繭は十六銭。晩秋蚕の繭は十五銭、骨折りぞんのくたびれもうけで、にっちもさっちもいかんことになった」

「それでどうやって不景気を切りぬけたの」

と晃君は聞きました。おじいさんは、

「養蚕もだめ、米作りもだめいうときは牛もだめ。木挽も炭焼きもみな骨折りぞんのくたびれもうけじゃ。そこでわしは人夫の組へはいつて、神戸のほうへ出稼ぎに出て、争議をやつとる工場の、職工代りの仕事もやった」

晃君は驚いたように、

「それはストライキ破りいうて、労働者の敵になることだよ、おじいさん」

「何になるか知らずに、金になりやあええ思うて、わしらはそういうことをした。そのときに賢い者らは、ストライキ組のビラを読んで、去年（昭和六年）からはじまった満州事変は、あれは日本の大金持ちが、不景気を切りぬけるためにはじめた戦争じやいうとった。

わしはなるほどと思うたが、それより深うは考えなんだ。そのうちに家から、三次の駅で貨物車へ木をはこぶ仲仕の仕事があるいうて手紙をよこしたので、帰ってきて仲仕に出るようになった。これはとても力のいる仕事で、だれでもできるわけではないが、収入もただの人夫よりずっといいし、家から通えるので、戦争ちゅうもわしはずっとそこへ通うた」